

次の文章は『源氏物語』の一節で、難を逃れるために須磨下りを決意した光源氏が、源氏の父・桐壺院の没後は妹と暮らしている麗景殿の女御のもとを訪れる場面である。なお、源氏は女御の妹にもかつて会ったことがあり、再会したいとひそかに思っている。これを読んで、後の設問に答えよ。

かの本意の所は、<sup>ア</sup>思しやりつるもしるく、人目なく静かにておはする有様を見給ふにも、いとあはれなり。まづ、女御の御方にて、昔の物語など聞え給ふに、夜更けにけり。二十日の月さし出づるほどに、いとど木高き陰ども木暗う見えわたりて、近き橘の薫り懐かしう匂ひて、女御の御けはひ、<sup>イ</sup>ねびにたれど、あくまで用意あり、あてに、らうたげなり。すぐれて花やかなる御おほえこそなかりしかど、むつまじう懐かしきかたにおほしたりしものをなど、<sup>ウ</sup>思ひ出で聞え給ふにつけても、むかしのことかきつらね思されてうち泣き給ふ。郭公、ありつる垣根のにや、おなじ声にうち鳴く。慕ひ来にけるよとおほさるるほども、艶なりかし。「いかに知りてか」など、しのびやかにうち誦し給ふ。

「<sup>エ</sup>ちちはなの香をなつかしみ時鳥花散る里をたづねてぞ訪ふ

いにしへ忘れがたき慰めには、まづ参り侍りぬべかりけり。こよなうこそ、<sup>オ</sup>まぎるることども、数そふことも侍り

けれ。おほかたの世に従ふものなれば、昔語りも、かきくづすべき人少なうなりゆくを、まして、つれづれも紛れなく思さるらむ」と、きこえ給ふ。みないと殊更なる世なれば、ものをいとあはれに思し続けたる御気色の浅からぬも、人の御様からにや、多くあはれぞ添ひける。

「人目なく荒れたる宿は たちばなの花こそ軒のつまとなりけれ」

とばかりのたまへる、さはいへど、人にはいと異なりけりと、思しくらべらる。

(源氏物語)

〔注〕 ○いかに知りてか——「古へのこと語らへば時鳥いかに知りてかふる声のする」による。

○たちばなの香を——「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」による。

### 設問

(一) 傍線部ア・イ・エ・オを現代語に訳せ。

(二) 「思ひ出で聞え給ふ」(傍線部ウ)とは、誰が誰のどのような様子を思い出しているのか、説明せよ。

(三) 「たちばなの花こそ軒のつまとなりけれ」(傍線部カ)とは、どういうことを言っているのか、具体的に説明せよ。

(各 14 cm × 1 行)

(14 cm × 2 行)

(14 cm × 1 行)